岐阜経済大学論集 35 巻 3 号（2002 年）

ゾンバルトにおける「資本主義」語

――「資本主義」語のはじまり（9･完）――

重　田　澄　男

I. 19 世紀末の時代状況
II. 人物と社会的活動
III. 『近代資本主義』初版
IV. 「資本主義」概念の転換
　1. 「資本家的企業家」論文
　2. 『近代資本主義』第 2 版

I. 19 世紀末の時代状況

ゾンバルトが『近代資本主義』の初版を出版したのは 1902 年である。

シェフレの『資本主義と社会主義』が出版された 1870 年からゾンバルト『近代資本主義』初版出版の 1902 年までの約 30 年のあいだに，ヨーロッパの労働運動と社会主義運動は大きな変化をとげた。

1870–71 年に，プロイセン･フランス戦争（普仏戦争）があり，その勝利のうえにドイツ帝国が打ちたてられ，その敗北のなかでフランスではパリ･コミューンの成立と崩壊という劇的な出来事がおこった。そして，この激動の 1870–71 年を転換点として，19 世紀末のヨーロッパはそれ以前の時代と大きく変化する。

この時期のマルクス関連の事情についてみると，1867 年に『資本論』第 1

巻を出版したマルクスは1883年に死亡。そして，エンゲルスの10年にわたる労苦によって，1885年にその第2巻が，1894年に第3巻が出版されて，『資本論』全3巻が世に出ることになる。その翌年1895年にエンゲルスも死亡する。

ところで，ドイツの社会主義運動は，1863年にラサールの指導のもとに結成された「全ドイツ労働者協会」と，1869年にベーベルやリープクネヒトたちによって設立された「ドイツ社会民主主義労働者党」とが，1875年にゴータで合同大会をひらいて「ドイツ社会主義労働者党」を結成することとなり，ここに，ドイツにおいて単一の社会主義政党が生みだされることになる。

だが，ドイツ社会主義労働者党は，1877年に帝国議会選挙で9%の得票率を獲得してその発展が軌道にのりかけた時点で，1878年，ビスマルクの社会主義者鎮圧法による弾圧に直面することとなる。だが，同党の“英雄時代”と呼ばれるこの時期の試練のなかで，同党は労働者階級のなかに影響力を拡大しながら力を蓄え，1890年のビスマルク退陣と社会主義者鎮圧法の撤廃ののち「ドイツ社会民主党」と党名をあらため，帝国議会での議席数を35議席（得票率19.7%）も獲得し，その後さらなる拡大と躍進への道を歩んでいる。

しかも，こうした発展のなかで，社会主義者鎮圧法にたいする戦いは，ビスマルク的な国家社会主義的色彩をもったラサール派の影響力を弱めて，マルクス派の勝利を結果することとなった。1891年に確定したエルフルト綱領においては，ラサール主義とマルクス主義との折衷的内容の1875年のゴータ綱領と異なって，マルクス的な理論の影響の強いものとなっている。

ところで，プロイセン・フランス戦争の勝利とドイツ帝国の樹立によるドイツ統一は，ドイツにおける資本主義の発展を促したが，パリ・コミューンは既成勢力に大きな衝撃を与え，労働者階級と社会主義にたいする恐怖感をひきおこすこととなった。

こうした状況のなかで，1873年に，ドイツでは歴史学派の経済学者たちを中心として「社会政策学会」が創立されることになる。

社会問題や社会政策にかんする研究や提案をおこなうために設立された「社会政策学会」は，19世紀後半における資本主義経済のめざましい発展にともなう労働者の貧困や労働争議などの社会問題が深刻になりはじめたなかで，シュモラー，ブレンターノ，ワーグナーたちの歴史学派の立場にたった経済学者とともに，官僚，政治家，ジャーナリストなども参加し，工場法や中小企業，農業，税制，交通など当時の重要な経済・社会問題についての実証的な調査研究をすすめる一方，社会政策についても具体的提案をおこない，学界，官界，ジャーナリズムに多大の影響を及ぼした。学会の内部には保守派，自由派の諸潮流があったが，その基本理念は，社会主義による体制変革には反対しながらも，資本主義の欠陥を認め，国家の政策をつうじて階級対立の緩和をはかる社会改良主義であった。

国際労働運動についてみると，パリ・コミューン後の反動によって停滞していた労働運動も，1880年になるとふたたび活発化し，ドイツ社会主義労働者党を筆頭にヨーロッパ各国とアメリカに労働者政党が誕生するようになる。

こうしたなかで，ふたたび新しい国際的な労働者の組織としてインターナショナルを結成する気運がフランスとイギリスの労働者を中心にもりあがり，1889年7月14日，フランス革命100周年を記念して20カ国からパリに集まった社会主義者の国際大会で，労働者の国際組織を結成することが決定され，1891年にブリュッセルで第二インターナショナルの正式の大会が開かれることになった。

この時期は，労働者代表の議会参加や出版の自由などによって合法的活動の条件がひろがるなかで，第二インターナショナル加盟政党は大衆のあいだに影響力を拡大し，そこにおいて労働運動のなかでもマルクス主義が支配的な影響を及ぼすものとなった。

かくして，かつてドイツ国内においてはその存在も理論もほとんど知られていなかったマルクスが，1870年以降の30年のあいだに，労働者政党としてのドイツ社会民主党においても，国際的な労働者組織である第二インターナショナルにおいても，主導的な影響力をもつようになり，その理論はアカデミズムにおいても取りあげられるようになってきていた。

ゾンバルトが，歴史学派の重鎮たちによる指導を受けながら，社会主義とマルクス主義とに関心をよせ，自分なりの資本主義的現実把握をおこなうための礎石を打ち固めつつあったのは，まさにこの19世紀末から20世紀初めにかけての時期のことである。

II. 人物と社会的活動

ゾンバルト（Werner Sombart, 1863–1941）は[1]，1863年に，ライプチヒ西方の小都市エルムスレーベンにおいて，アントン・ルートヴィッヒ・ゾンバルトの末子として生まれる。父アントンは，貧しい土地測量士から農場主ならびに甜菜糖工場の企業主となった勤勉な人物で，1861年にはプロイセンの国会議員に，1871年ドイツ第二帝制成立後には帝国議会の議員にもなっている。

1875年，ゾンバルト12歳のとき，議会の仕事に専念することになった父とともにベルリンに移ってギムナジウムに入り，1882年にはベルリン大学に入学し，歴史学派の総帥にしてカール・メンガーとの方法論争をもおこなったシュモラーと，歴史学派右派の国家社会主義の立場をとるワーグナーとに学んで大きな知的刺激を吸収している。また当時ベルリン大学に赴任していたディルタイから科学方法論について影響を受けている。

1885年ベルリン大学卒業の後，1888年までイタリアのピサ大学に留学。イタリアの貧しい農村問題に関心をもち，学位論文『ローマのカンパーニャ』

を書き，1888年ベルリン大学より学位を授与される。そのあと，1888年から1890年にかけてブレーメン商工会議所の法律顧問となっている。

この時期，ゾンバルトは，ベルリンでは教職を見いだすことができず，1890年に，正式の教授資格をもたない員外教授の身分で，ブレスラウ（現在のポーランド領ブロツラフ）大学の国家学と統計学のセミナーの共同指導者としてプロイセン文化省によって任命され，彼はそこで16年にわたる“無言の影響の時代”を過ごすことになる。

ゾンバルトは，ブレスラウにおいて社会民主党のハインリヒ・ブラウンと親交をむすび，1891–92年にマルクスの理論についての研究を集中的におこなったようである[2)]。

ゾンバルトは，30歳代の半ば頃まではマルクス主義の影響を強く受けており，『19世紀における社会主義と社会運動』（1896年）はその代表的著作とされている。この時期には，ゾンバルトは，社会主義とりわけマルクス主義に同情的な「赤い教授」として知られていたが，本書の第4版（1901年）ないしは第5版（1905年）以後，マルクス主義の修正と批判を顕在化させて批判的立場を強めた，といわれている。

1902年，ゾンバルトは代表的著作『近代資本主義』全2巻を出版する。実はブレスラウ大学在任中に，フライブルク，カールスルーエ，ハイデルベルクの各大学から招致の動きがあり，そのうちフライブルクとハイデルベルクの2つはマックス・ウェーバーの後継者として推薦されたものであったが，ゾンバルトがマルクス学者として盛名をはせていて急進的な思想の持ち主とみられていたため，帝国政府の容認するところとならず，大公の拒否権によって挫折している。

しかし，ゾンバルトは，1904年以来，ウェーバーらと『社会科学と社会政策のためのアルヒーフ』（*Archiv für Sozialwissennschaft und Sozialpolitik*, 1904–1933）の編集にあたり，社会政策における倫理的立場を重視する新歴史学派に対抗して社会政策の科学性確立の必要を強調している。

1906年になって，ゾンバルトは，新設のベルリン商科大学に移ったが，この大学は学位授与資格をもっておらず，しかもここでもまたゾンバルトは員外教授であった。

ゾンバルトは，『ユダヤ人と経済生活』(1911年)，『贅沢と資本主義』(1913年)，『戦争と資本主義』(1913年)，『ブルジョア：近代経済人の精神史』(1913年）などにおいて，プロテスタンティズムの宗教思想と資本主義的発展との関連についてのウェーバーの見解に対峙するかたちで，資本主義の形成にとって寄与した諸要因についての研究をおしすすめている。

だが，第一次世界大戦勃発後の1915年，ゾンバルトは，『商人と英雄――愛国的意識』を出版する。それは，イギリスの商人根性と対比してドイツの軍隊精神を謳歌し，ドイツ国民の士気高揚に一役買ったと評せられたもので，社会主義者ゾンバルトをイメージしていた世人を驚かせた。

しかし，その翌年の1916年には，『近代資本主義』の全面的な増補改訂をおこなった2巻全4冊からなる再版を出し，その後，さらに1927年に第3巻を出して，全3巻6冊本の膨大な著作として完成している。

1917年，ゾンバルトは，前年に死去した恩師アドルフ・ワーグナーの後任として，やっと正教授としてベルリン大学に職を得ることができた。

経済学者としてのゾンバルトの立場は，理論を軽視する歴史学派と，自然科学的方法に依拠する当時の理論経済学との，いずれにたいしても批判的であって，理解＝社会学的な方法によりながら，理論と歴史とを総合した経済社会の全体的把握をおこなおうとしたものである。その代表的な著作が『近代資本主義』であるが，その方法論を展開したものとして晩年の『三つの経済学』(1930年）がある。

なお，ゾンバルトは，1931年にベルリン大学を退職して名誉教授になったが，その後も，1940年までベルリン大学とベルリン商科大学とにおいて教えつづけていた。

ゾンバルトは，とくに第一次大戦後には，マルクス主義にたいして敵対的

な立場を徹底するようになり，『社会主義と社会運動』の改訂版としての『プロレタリア社会主義』（1924年）では民族に基礎をおく国家社会主義を主張するようになっていて，『ドイツ社会主義』（1934年）においてもその見解が展開されている。

さらに，彼には最晩年の著作『人間について――精神科学的人間学』（1938年）といったダーウィニズムとかかわらせた人間学的領域にかんする著書がある。ゾンバルトは，晩年にはこれらの問題に取り組んでいたが，第二次世界大戦が始まった翌々年の1941年にベルリンで死去した。79歳であった。

〔主要著作〕[3)]

(1) *Die römische Campagna : eine sozialökonomische Studie*, Leipzig, 1888.『ローマのカンパーニャ』

(2) *Sozialismus und soziale Bewegung im 19. Jahrhundert*, Jena, 1896. 神戸正雄訳『19世紀に於ける社会主義及び社会的運動』（初版）日本評論社，1903年，池田龍蔵訳『社会主義及社会運動』（第7版）三田書房，1923年，林要訳『社会主義及び社会運動』（第8版）同人社，1925年。

(3) *"Dennoch!" Aus Theorie und Geschichte der gewerkschaftlichen Arbeiterbewegung*, Jena, 1900. 森戸辰男訳『労働組合の理論と歴史』大原社会問題研究所出版部，1922年。

(4) "Technik und Wirtschaft" *Jahrbuch der Gehe-Stiftung zu Dresden* VII, 1901. 山口修二郎訳『技術と経済』大学書林，1935年，阿閉吉男「技術と経済」『技術論』科学主義工業社，1941年，所収。

(5) *Der Moderne Kapitalismus*, Leipzig, 1902, 2 Bde.; 3 Vol. 6 Bde., 1916–27. 岡崎次郎訳『近世資本主義』第1巻第1冊，第2冊（1916–27年版の第1巻および第2巻の邦訳，第1巻の途中まで）生活社，1942，1943年，梶山力訳『高度資本主義 I』（1916–27年版の第3巻の邦訳，途中まで）有斐閣，1940年。

(6) *Die deutsche Volkswirtschaft im 19. Jahrhundert*, Berlin, 1903.『19世紀

におけるドイツの国民経済』

(7) *Die gewerbliche Arbeiterfrage*, Leipzig, 1904. 農商務省商工局訳編『工業労働者問題』農商務省商工局，1919年，鈴木豊訳『労働問題と労働政策』有斐閣，1919年。

(8) *Warum gibt es in den Vereinigten Staaten keinen Sozialismus?*, Tübingen, 1906.「何故亜米利加は社会主義なき乎」河田嗣郎訳『社会問題及社会運動』岩波書店，1919年，所収。

(9) *Das Lebenswerk von Karl Marx*, Jena, 1909.『カール・マルクスのライフワーク』

(10) *Die Juden und das Wirtschaftsleben*, Leipzig, 1911. 金森誠也監修，安藤勉訳『ユダヤ人と経済生活』荒地出版社，1994年。

(11) *Krieg und Kapitalismus*, München, 1913. 金森誠也訳『戦争と資本主義』論創社，1996年。

(12) *Luxus und Kapitalismus*, München, 1913. 田中九一訳『奢侈と資本主義』而立社，1925年，金森誠也訳『恋愛と贅沢と資本主義』至誠堂，1969，論創社，1987年，講談社，2000年。

(13) *Der Bougeoise, Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen*, München, 1913. 金森誠也訳『ブルジョア：近代経済人の精神史』中央公論社，1990年。

(14) *Händler und Helden: patriotische Besinnung*, München, 1915.『商人と英雄——愛国的意識』

(15) *Soziologie, Eine Vorwort, in: dres. (Hg.), Sozioligie*, Berlin, 1923. 景山哲雄訳『社会学』而立社，1924年。

(16) *Der proletarische Sozialismus: ("Marxismus")*, 2 Bde., Jena, 1924. 田辺忠男訳『プロレタリア社会主義』日本評論社，1932年。

(17) *Die drei Nationalökonomien. Geschichte und System der Lehre von der Wirtschaft*, Berlin, 1930. 小島昌太郎訳『三つの経済学：経済の歴史と体

系』雄風館書房，1933 年。

（18） *Die Zukunft des Kapitalismus*, Berlin, 1932. 鈴木晃訳『資本主義の未来』（『世界大思想全集』第 86 巻，所収）春秋社，1933 年。

（19） *Deutscher Sozialismus*, Berlin, 1934. 難波田春夫訳『ドイツ社会主義』三省堂，1936 年，早稲田大学出版部，1982 年。

（20） *Vom Menschen : Versuch einer geistwissenschaftlichen Anthropologie*, 2 Auflage, Berlin, 1938.『人間について――精神科学的人間学』

III.『近代資本主義』初版

1902 年，ゾンバルトの『近代資本主義』初版が出版された。本書は，全 2 巻で，669 ページと 646 ページ合わせて 1315 ページの膨大な著作であった。

本書の全体の目次構成は次のごとくである。

第 1 巻 資本主義の生成

序　説　経済的労働の組織

第 1 部　手工業としての経済

第 2 部　近代資本主義の生成

第 1 篇 〔タイトルなし〕

第 2 篇　資本の成立

第 3 篇　資本家的精神の生成

第 4 篇　工業的資本主義の生成とその展開の妨害

第 5 篇　初期資本家的時代の末期における工業と資本主義

第 6 篇　現代における工業的資本主義の凱旋行進

第 7 篇　現代における手工業と手工業者

第2巻　資本家的発展の理論

第1部　経済生活の新たな基礎づけ

第2部　経済生活の新たな形成

第1篇　近代的農業の生成と古い土着の経済制度の解体

第2篇　近代的都市の起源と本質

第3篇　需要の新形成

第4篇　財貨販売の新形成

第3部　工業的競争の理論

第1篇　〔タイトルなし〕

第2篇　最善の実行のための闘い

第3篇　価格闘争

第4篇　障　　害

このゾンバルト『近代資本主義』初版の内容と意義については，田村信一氏による詳細な研究[4)]がある。それによると，本書は，なぜ手工業は没落し資本主義は発展するのかということをモチーフとしたものであって，シュモラーなど歴史学派保守派の主張する中産階級保護政策にたいして資本主義的発展の不可避性を論定するために書かれたものである。

第1巻「資本主義の生成」は，第1部「手工業としての経済」と第2部「近代資本主義の生成」というかたちで「手工業」と「資本主義」との2部構成として編成されており，「手工業」と対比しながら「資本主義」における物的条件としての資本と主体的な要因としての「資本家的精神」の成立が発生史的に問題とされて，資本主義の勝利と手工業の資本への従属が明らかにされている。

そして，第2巻「資本家的発展の理論」では，資本主義が手工業を解体し発展する理由を，資本主義に内在する諸条件の検討をつうじて解明しようとしている。

その第１巻において，ゾンバルトは，まず，序説「経済的労働の組織」において，経済活動における「経済秩序」「経済主体」「経済原理」「経済体制」といった総括的な経済的諸概念について簡単に説明する。

そして，本論にはいり，第１部「手工業としての経済」において，「手工業」を次のように定義づけている。

「手工業（狭い意味での）とは，生活費にみあう対価と引きかえに作業や生産物を供給するというやり方で，営業的使用対象物の仕上げや加工のために技芸と通常の手仕事とのあいだの中間の熟練を利用するところの，営業的労働者（gewerbliche Arbeiter）の努力から生じる経済組織のことである。」[5)]

このように，ゾンバルトは，「手工業」を，技術的には簡単な道具を用い，主として手先の熟練によっておこなう小規模の企業における，手工業的労働者の生活のための「生計」の確保を目的とした営業活動をおこなう組織である，としているのである。

そのように，ゾンバルトは，手工業について，欲求充足のための生業を目的とするという経済原理をもった経済形態であるととらえる。

そのうえで，ゾンバルトは，第１巻第２部「近代資本主義の生成」にはいり，第１篇中の「資本主義の概念と本質」なる章において，「資本主義」の「概念」を次のように指摘する。

「資本主義とは，その特有の経済形態が資本家的企業であるところの経済様式のことをいう。後者は，定義のためそしてその本質性において特徴づけるために必要である。これがこの発端の章の課題である。ところで，資本家的企業とは，取引契約総額による貨幣価値的業績および報酬を超える物的財産の価値増大をおこなうところの，すなわち値上げ（利潤）をとも

なって所有者のもとに再生産するということを目的としたところの，経済形態のことをいう。そのような方法で役立てられる物的財貨を資本という。」[6)]

この『近代資本主義』初版のゾンバルトは，まさしく「手工業」概念との対比におけるものとして「資本主義」概念を特徴づけようとしている。

すなわち，ここにみられる「資本主義」概念においては，まず，「資本主義とは，その特有の経済形態が資本家的企業であるところの経済形態のことをいう」というかたちで，「資本主義」をなによりも「資本家的企業」という《企業》形態においてとらえられるものとしている。

そして，手工業労働者の欲求充足を目的とした〈生計〉のための「営業的労働者」の経済活動である「手工業」に対比される特徴をもつものとして，「資本主義」を，「資本家的企業」における「物的財産の価値増大」，すなわち「利潤」の獲得を「目的」とした「企業」としての「経済形態」であると，「資本主義」概念の特徴的内容をとらえるのである。

そのように，ゾンバルトは，「資本主義」の「概念の分析」において，「資本主義」を「資本家的企業」における利潤獲得を目的とした経済様式としてとらえたうえで，そのような「資本家的企業の前提と条件」の把握をおこなうために，まず，「資本家的企業」における活動目的としての「物的財産の価値増殖」のための前提となる「客体的条件」たる「資本」について指摘する。

「資本家的企業にあっては，物的財産の価値増殖が問題となるから，資本家的企業への第一歩がふみだされる前に，相応の高さの物的財産が経済主体の処分権のなかに，明確に堆積されていなければならない。物的財産が“相応の高さ”に，それは非常にあいまいに表現されているが，しかし，それにもかかわらずこの回りくどい言い方で十分である。……理論的には，資

本家的経済は一定の高さの物的財産の先行の蓄積なしには不可能である，ということの一般的確認で十分である。これは簡単ではあるが重要である，そのうえに，基礎となる知識は，なおそこへ，より精密に，資本家的組織の前提を形成する物的財産の特性をより正確に規定することが可能である。それは貨幣所有としての存在を必要とする。ここで，同時に，資本家的組織の存在にとって必要な客観的条件を先取りしていえば，そもそも資本主義が考えられる以前に，社会は，その価値観念を，一般的等価物すなわち貨幣――もっと正確にいえば金属貨幣（あるいはその代用品）――という抽象的形態において，すでに対象化していなければならない。」[7)]

このように，「資本家的企業」がまずその第一歩をふみだす前に「資本家的組織の存在にとって必要な客観的条件」として，「相応の高さの物的財産が経済主体の処分権のなかに堆積」されること，すなわち，企業のもとへの「大量の貨幣蓄積」が必要である，と指摘する。

ところで，そのような「大量の貨幣蓄積」はそのまま自動的に資本としての価値増殖をおこなうものではない。蓄積された貨幣が資本へ転化するためには，経済主体としての企業家の「資本家的精神」が必要であると，次のように指摘する。

「しかし，巨大なる貨幣蓄積といえども，たんなる資本家的企業の意図にとってさえもまだ十分なる前提条件ではけっしてない。それのみか，蓄積された貨幣額を資本に転化せしめるために，財産をもつ経済主体につけ加えなければならないのは，その所有者の特殊資本家的精神である。そこにおいて，資本家的企業家として固有のものとして知りうるあらゆるその心的気分を，すなわち，利潤志向・計算センス・経済的合理主義を，理解することができる。それで資本主義は可能となるであろう，まさにこの経済的合理主義が古典派経済学の経済人の姿において化身として必要であるの

には，いささかの驚きもありえない。」[8)]

かくして，「資本主義」が成立するために必要な規定的要因として，客観的条件として貨幣財産という形態での「物的財産」が企業のもとへ蓄積されることが必要であるが，さらに，そのような貨幣財産が資本としての価値増殖活動をおこなうための決定的な主体的前提として，企業家の精神的気分としての「資本家的精神」が不可欠のものとして必要である，とするのである。

すなわち，資本家的《企業》における価値増大をめざす「営利」のための活動という企業家の「資本家的精神」の発揮によって，無限の営利がシステム化された経済原理をもった「資本家的企業」としての経済形態となる，とするのである。

このように，「資本家的企業」における「企業家」の本質的属性としての「資本家的精神」について，企業家の「資本家的精神」の形成とその発動が「資本主義」の形成にとっての起動的要因をなすものであると，ゾンバルトは強調する。

そして，そこにおける経済主体の「資本家的精神」は，たんなる「利潤欲」だけではなくて，「計算センス」と「経済的合理主義」をもつところの合理性・計算性を基盤としたものである，とする。

『近代資本主義』初版におけるゾンバルトは，このような「資本家的精神」をもった「資本家的企業」のなかに「資本主義」を把握するのである。

このようなものとして，『近代資本主義』初版におけるこれら「資本主義」「資本家的企業」「資本家的精神」なる用語のもつ重要な意義は，その使用状況についてみても明らかである。

「資本主義 Kapitalismus」という用語は，若干の遺漏があるかもしれないが，第1巻において139回，第2巻において101回，合計240回もの使用頻度において使われている。なお，Kapitalismus 以外にも，イタリア語での

capitalismo が 2 回使われているので，それも合わせると「資本主義」という用語は総計 242 回も使われていることになる。

また，「資本家的企業 kapitalistische Unternehmung」という用語は，第 1 巻において 84 回，第 2 巻において 69 回，合わせて 153 回も使っており，それと並んで，「資本家的企業家 kapitalistische Unternehmer」という用語を，第 1 巻で 42 回，第 2 巻で 39 回，合わせて 81 回使っている。

したがって，「資本家的企業」と「資本家的企業家」との両者を合わせると，第 1 巻において 126 回，第 2 巻において 108 回，合計 234 回と，まさに「資本主義」という用語の使用頻度に匹敵するほどの回数である。

「資本家的精神 kapitalistische Geist」という用語は，意外に少なくて 27 回しか使用していない。だが，「資本主義」にとって「資本家的精神」のもつ重要性については，ゾンバルトは明示的に強調しているところである。

これらの資本主義的用語の重要性については，『近代資本主義』初版における《事項索引》の掲載項目にもしめされている。《事項索引》に掲載されている資本主義的用語についてみると，「資本主義 Kapitalismus」という用語はもちろんのことであるが，それとともに，「資本家的 kapitalistisch」という資本主義的なものとしての規定的限定詞をつけた用語としては，「資本家的企業 kapitalistische Unternehmung」と「資本家的精神 kapitalistische Geist」との 2 つが掲載されている。このことは，この『近代資本主義』初版のゾンバルトにおける資本主義把握にとって「資本主義」という用語とともに「資本家的企業」と「資本家的精神」という用語と概念の重要性をしめすものである。

それと対照的に，『近代資本主義』初版においては，マルクスの資本主義的概念にとっての基本的用語たる「資本家的生産様式 kapitalistische Produktionsweise」はほとんど登場してこない。

まず，『近代資本主義』初版の第 1 巻においては，「資本家的生産様式」という用語はまったく使われていない。

このことは，第1巻においておこなわれている「資本主義」の定義においても，さらには，「資本主義」なる「概念の分析」におけるその基軸的要因たる客観的条件としての「資本」と主体的前提としての「資本家的精神」との析出やその検討においても，「資本家的生産様式」という用語と概念はまったく必要とされなかったことを意味する。

『近代資本主義』初版では，「資本家的生産様式」という用語は第2巻においてのみ，それも14回使われているだけである。

しかも，この『近代資本主義』初版の第2巻において使われている「資本家的生産様式」という用語は，たとえば，「少なくともすでに初期資本主義の時期に資本主義の手に完全に帰しているところの，以前には手工業に適した生産の分野（鉱山業，皮革工業，織物工業，製鉄業の個々の分野）については度外視しても，手工業に適した活動の他の領域において，資本家的生産様式がすでに採用されはじめ，手工業の状態はほとんど危険に瀕している」[9]とか，「われわれは，資本家的生産様式の優越の説明に役立つ一連の重要な理由を瞥見する。それはより安価に生産する。というのは，それは多くの場合，より安価な労働力を使っているからである」[10]とか，といったかたちで，「資本主義」のたんなる生産領域における事態にたいして使われているにすぎないものである。

ついでながら，「資本家的生産 kapitalistische Produktion」という用語も，第1巻において3回，第2巻で9回，合計しても12回しか使われていない。

マルクスの場合には，なによりもまず，近代社会特有の規定的要因をとらえるものとして，経済的諸関係にとっての基礎をなす《生産》に焦点をあてながら，生産様式の特殊歴史的な近代的形態をとらえて，それを「資本家的生産様式」という用語によって表現して近代社会の経済構造把握をおこなっているのであるが，それにたいして，『近代資本主義』初版におけるゾンバルトの「資本主義」概念においては，「手工業」企業との対比におけるものとして資本家的《企業》の特徴をとらえ，「資本主義」の規定的内容として

いるのである。

ここに，ゾンバルトの「資本主義」把握の原点をみることができる。

このような『近代資本主義』初版におけるゾンバルトの「資本主義」概念には，2つの大きな特徴点がある。

その1つは，「資本主義」の基軸的要因を，近代社会特有の歴史的規定性をもつ生産形態としての資本＝賃労働関係においてではなくて，生産的基礎とかかわりなしに価値増殖を目的とした《企業》活動においてとらえられているということである。

もう1つは，この「資本主義」概念においては，「資本主義」が生みだされるのは企業家の「資本家的精神」という精神の起動的規定性によるものであるとして，「資本主義」は観念の産物とされることになっているということである。

ゾンバルト自身，このような「資本主義」という用語の使用と，先導的創造性をもったものとしての「資本家的精神」については，ともにみずからの積極的提示によるものであると自負しているところである。

だが，そのような《生産》における資本＝賃労働関係を抜きにした「資本主義」用語の使用と，「資本家的精神」なる人間精神による資本主義にたいする創造的規定性とは，ゾンバルトの「資本主義」概念にとっての問題点をなすものである。

ゾンバルト自身，すでに1896年の『19世紀における社会主義と社会運動』において，労働運動と社会主義について積極的に取り組んだにもかかわらず，『近代資本主義』初版における「資本主義」概念の定義においては，近代社会に特有の生産構造における資本＝賃労働関係に目を向けないで，もっぱら「資本家的企業家」の「資本家的精神」の発動によって形成される「資本家的企業」の活動に焦点をあてて，「資本主義」把握をおこなっているのであるが，そのような資本＝賃労働関係の看過ということは，「資本家的生産様式」という用語をほとんど使わなくなったこととも関連しているとこ

ろである。

IV.「資本主義」概念の転換

1.「資本家的企業家」論文

ゾンバルトは，1902年に『近代資本主義』の初版を出してのち，1911年には『ユダヤ人と経済生活』を，1913年には『贅沢と資本主義』『戦争と資本主義』『ブルジョア：近代経済人の精神史』といった大著を，次々に出している。

これらの著作は，いずれも「『近代資本主義』改訂のために試みた経済史研究の成果」であって，その点について『ユダヤ人と経済生活』の序文では次のように述べている。

「わたしは拙著『近代資本主義』を全面的に書き改めようとしていたとき，偶然ユダヤ人問題にめぐりあった。そのとき，重要だったのはなかでも「資本家的精神」の起源に通ずる思考の歩みを一層深めてゆくことであった。ピューリタニズムと資本主義とのあいだの関連についてのマックス・ウェーバーの研究によって，わたしは当然のことながら，宗教の経済生活への影響を，これまで以上にくわしく探求せねばならなくなった。そしてそのさいわたしは，まずはじめに，ユダヤ人問題にめぐりあった。なぜならウェーバーの研究をくわしく調べたところわかったのだが，資本家的精神の形成にとって実際に意味があったように思われるピューリタンの教義の構成要素のすべてが，ユダヤ教の理念圏からの借り物であったからである。」[11)]

さらに，『贅沢と資本主義』においては次のようにいう。「わたしが刊行しようとしている諸研究は，『近代資本主義』改訂のために試みた経済史研究の成果である。……わたしは先年出版した『ユダヤ人と経済生活』によって，これらの研究刊行の口火をきった。……ところで，いま刊行しようとするわたしの研究のいわば第二弾では，近代資本主義の形成にあたって，他の二柱の神が演じた役割を指摘したいと思う。／その第2の版は「戦争と資本主義」を扱ったものである。その第1の版は「贅沢と資本主義」をとりあげたものであるが，しかし，本書の内容をなすこの前半部分は，「恋愛と贅沢と資本主義」と題してしかるべきものである……」[12]と。

これらの著書をつうじて，ゾンバルトは，「近代資本主義の形成」にあたって大きな役割を演じた「ユダヤ人」「戦争」「贅沢」等について取りあげ，「ブルジョア」としての「近代経済人の精神」すなわち「資本家的精神」の生成を問題にしているのである。

ところで，そのような取組みのなかで，ゾンバルトの「資本主義」概念に変化が生じている。

ゾンバルトは，『ユダヤ人と経済生活』において「資本主義」の新たな概念を提示するなかで，そこにおける「資本主義」という用語にわざわざ(注)をつけて，「ここでは抜粋のかたちでのみ取扱ってきた対象の詳細な記述については，『社会科学と社会政策のためのアルヒーフ』第29巻に載せたわたしの論文「資本家的企業家」を参照してほしい」[13]と指示している。

さらにまた，『ブルジョア：近代経済人の精神史』においても，その第5章「企業精神の本質」なる見出しにつけた(注)において，「この章で論じた問題を，わたしは最初に『社会科学と社会政策のためのアルヒーフ』第29巻（1909年）にのせたわたしの論文「資本家的企業家」で論述しておいた。そこで主張した見解を，わたしは現在いくつかの点で変えている」[14]と指摘している。

このような指摘は，ゾンバルトの「資本主義」概念の歩みにとって，1909

年の「資本家的企業家」と題されたこの論文がひとつの劃期をなすものであることをしめしている。

この「資本家的企業家 Der kapitalistische Unternehmer」と題された論文は，70ページほどのものであるが，「I.“資本主義”概念についての争論」，「II.“資本主義”概念の確定」，「III. 資本家的動機づけとその客観化」，「IV. 営利理念の展開」，「V. 経済の合理化」，「VI. 資本家的企業家の諸機能の相違」，「VII. 企業家と商人」，「VIII. 企業家素質」，「IX.“資本家的精神の分析と生成”」の9つの節からなっている。

その「II.“資本主義”概念の確定」において，ゾンバルトは，「資本主義」の特徴的メルクマールについて次のように述べている。

「資本家的経済体制（この表現は資本主義と同義であるべきである）にとって特徴的なメルクマールは，次のごとくである。

1. 個別的あるいは私的経済的組織。経済生活の“重心”は，共同団体（民族，国民）が多くの点で包含するところの私的経済にある。……

2. 職業区分が個々の経済のあいだを支配している。個別経済は自己充足的ではない。すなわち，その全体的需要は空間的に個々の消費経済をカバーしていないということ，ある経済が消費するということは他の経済が生産するという方法で相互に向けられているということに他ならない。

3. 市場適合的（取引経済的）組織。……

4. 生産諸要因はひとつの手のなかに結合していないで，いつでも社会のさまざまなグループによって体現されている。……その反対をなしているのは，手工業適合的な組織であって，そこにあっては，それぞれに市場のために労働する経済主体は，生産のあらゆる人的および物的必須物を装備している。

5. 人的生産要因たる“労働”もまた，人口の異なるグループを形成するところの，指導的（組織者的）労働と実行労働とが，もはや同一人物に

よってではなくて，いつでも異なる人物によって遂行されているというやり方で，分化されている。しかし，指導的（組織者的）労働は，必要な物的生産要因をわがものとしている人口グループの責務である。それゆえ，これが経済主体となる：彼らが経済運営のリスクを負い，彼らにとっての経済的動機をなすところのその利益は，生産の歩調や方向を決定する。」[15)]

ここにおいて，ゾンバルトは，まず，「資本主義」は「資本家的経済体制」と同義であることを，「資本家的経済体制（この表現は資本主義と同義であるべきである）」との文言によって指摘する。

そして，そのような「資本主義」と同義の「資本家的経済体制」にとっての「特徴的なメルクマール」として，(1) 私的経済，(2) 個別経済の社会的相互連関，(3) 市場経済関係，(4) 生産諸要因の社会的分散（手工業との相違），(5) 利益を動機とした指導的組織者的活動と実行労働との人的分離，の5つの点を挙げている。

ここで挙げられている5つのメルクマールは，『近代資本主義』初版において《企業》活動に焦点を絞った「資本家的企業」にもとづく「資本主義」概念の場合と違って，「資本家的経済体制」なる「経済体制」のなかでの私的経済，社会的連関，市場経済，生産要因の社会的分散，企業家と労働者との人的分離といったかたちで，「資本主義」概念を社会的な体制における特徴的事態についてとらえるものとしている。

そして，その最後のメルクマールにおいて，労働の2つの種類といったいささか未整理のかたちではあるが生産活動における資本＝賃労働関係が取りあげられており，経済主体としての資本家的企業者の経済運営活動における利益追求動機もここに接合されている。

ここには，「資本家的経済体制」という社会的な概括概念における「資本主義」の特徴的メルクマール確定へのステップがしめされている。

ゾンバルトは，そのうえで，「資本主義」という用語について，それはい

ろんな使い方をされてきたけれども，価値増殖をおこなう“資本”の優越と支配を表現するものとして，「われわれの経済体制」を表現するには適切な言葉であると，次のように積極的な評価と意義づけをおこなっている。

「資本主義という言葉は，それによって特徴がしめされている経済体制の本質的特色を実際に上手に表現しているものであって，まったくうまく選びだされているものである。すなわち，資本の優越――というのは，われわれは，さしあたり大ざっぱに，経済的過程の開始と遂行のために必要な物的財産を，われわれの経済体制において“資本”として特徴づけたいと欲するからである。そこで，“支配する”とは，疑いもなく，その代理人（かならずしも所有者でなくて！）として，いつでもあらゆる場合に経済主体であるかぎりにおいてである。“資本”は，われわれにとって特徴づけられた組織結合の内部における全部の経済生活を，より深く，より広い意味において，全体の経済的挙動についての利益として指導的な立場をとり，それゆえ，大きく一般的な経済的目的について，支配するのである。資本の価値増殖努力を“資本家的”経済体制にとっての独特の推進力として，あらゆる経済的出来事について，その現実性からこの経済体制の特殊な特色を必然的な結果として導きだす，ということを語ることが認められる。その結果，さらに次のようにいわなければならない。この経済体制の純粋な理念（Idee）は，推進力として作用するところの，生産が基盤のために役立つ物的財産すなわち資本の客観的な価値増殖努力を表現することになり，それゆえ，それはまったく正当に資本主義と呼ばれることになる。」[16)]

そして，そのうえで，ゾンバルトは，「資本家的企業」について，次の節「III. 資本家的動機づけとその客観化」において，「資本家的経済体制の“細胞”は資本家的企業である。資本家的企業のなかに資本家的経済の活動のた

めの推進力が達しているために，それからあらゆる生活が生じるのである」[17]と，『近代資本主義』初版では「資本主義」の基本的要因としていた「資本家的企業」を，ここでは「資本家的経済体制の“細胞”」として，「資本主義」の構成要因とみなしているのである。

このような1909年の「資本家的企業家」論文における「資本主義」概念についての取組みの後，ゾンバルトは，1911年の『ユダヤ人と経済生活』のなかで，「資本主義」についての新しい概念規定を次のように与えている。

「資本主義とは，規則的な二つの異なる人口グループ――一方は生産手段の所有者で同時に指導的な労働に取り組み，他方は財産のないたんなる労働者――が協同して仕事をするような交易的経済組織のことをいう。しかも，“資本”の代理人（経済過程の開始と実行のために必要な物的財貨の蓄えの代理人）が経済主体である。というのは，経済の種類と方向を決定し，その結果についての責任を負っているからである。」[18]

ここで打ちだされている「資本主義」概念は，『近代資本主義』初版における「資本主義」概念とは大きく異なっている。

『近代資本主義』初版の「資本主義」概念においては，利潤追求を目的とした「資本家的企業」において「資本主義」の規定的内容をとらえていたのにたいして，この『ユダヤ人と経済生活』における「資本主義」概念においては，生産手段の所有者としての資本の代理人と無産のたんなる労働者という2つの異なる階級の存在とその結びつきという資本＝賃労働関係が「資本主義」概念にとっての主たる内容とされ，それに「資本」の代理人が経済主体であるという指摘がつけ加えられているのである。

ところで，ゾンバルトは，そのように社会体制的内容における新しい「資本主義」概念を打ちだしながらも，その指摘につづいて述べている「資本家的経済組織」の説明においては，せっかく新たな「資本主義」の定義におい

て打ちだした資本＝賃労働関係についてではなくて，『近代資本主義』初版におけると同じようなかたちで，「資本家的企業」にとっての特別の性質をなすものとしての「営利理念」を「資本家的経済組織」を支配する理念としているのである。

「すべての経済的な出来事にたいする資本家的経済組織にとっての固有な起動力は，個々の資本家企業家にたいして客観的な強制力として立ち向かい，彼らの行動をまったく決まった進路に強制するところの，資本の活用努力である。このことを次のようにも表現できる，資本家的経済体制を支配する理念は営利理念である，と。

資本家的経済のこの最高目的と，そして，それがおこなわれている外的な条件から，今やおのずから資本家的企業の枠内で演じられるこの経営の特別のやり方が生じ，それゆえ資本家的企業の特別な性質が生じる。

経営のたえざる拡張に向けての動因を与えるところの，組織的な収益達成へ向けられる経済管理から，たやすく，経済的な態度の最高に合理的な方法へ，すべての商売の意識的な遂行が生じてくることになる。」[19)]

このように，ゾンバルトは，資本＝賃労働関係を中心的内容とした「資本主義」概念を新しく打ちだしながら，それを生かすことなしに，「資本家的経済組織にとっての固有な起動力」であり，「資本家的経済体制を支配する理念」は「営利理念」であると，「資本主義」の規定的内容を「資本家的企業の特別の性質」に絞り込んでいるのである。

そのような観点から，ゾンバルトは，この『ユダヤ人と経済生活』の全体にわたって，「資本主義」の起動的要因としての企業家の「資本家的精神」とユダヤ人との関連について論究しており，この書物では，新しい「資本主義」概念において提示した２つの労働グループとしての資本＝賃労働関係の形成による「資本主義」の生成に目を向けようとはしていないのである。

2.『近代資本主義』第2版

ゾンバルトは，初版をほぼ全面的に書き変えた『近代資本主義』第2版として，2巻4冊，総ページ2140ページを超える大著[20]を，1916年に出している。

ゾンバルトは，初版では，「資本主義」を「手工業」との対比という基本的観点から取りあげていたのにたいして，第2版においては，ヨーロッパの歴史的発展における「経済時代」ならびに社会構造的な「経済体制」という観点から，「資本主義」について取りあげている。

そのことは，第2版において，『近代資本主義』の書名そのものに，「端初より現代にいたる全ヨーロッパ経済生活の歴史的体系的叙述」という副題がつけられているところにも，しめされている。

ゾンバルトは，「第2版への序」において第2版と初版との相違について述べるなかで，「素材的には新しい版はいちじるしく拡大された。初版は歴史的断片を含むにすぎなかったが，この新しい版はヨーロッパ諸国民の経済的発展全体の描写を与えようとする。それゆえ，今度は，わたしは，カロリング王朝時代をもって叙述をおこし，初版ではほとんど顧みられなかった初期資本主義の時代，したがって，ことに16，17および18世紀の時代をつうじて現在にいたるまでを，とくに詳細に取り扱う」[21]と指摘している。

そのように，『近代資本主義』第2版の叙述の対象は，時期的には，ゲルマンの民族大移動が終わってのち，ヨーロッパ諸国民がみずからの経済生活の基礎を確定して新たな成長を開始する時期たる8世紀から，執筆時点たる20世紀にいたるまでで，1000年以上にわたるものである。

しかも，そこにおいて，ゾンバルトは，「経済体制」とそれに対応する「経済時代」という基本概念によって把握していこうとする。

ゾンバルトは，「国民経済学の中心概念は経済体制の概念である」として，

「経済体制」把握をおこなう必要を強調する。

「国民経済学の中心概念は経済体制の概念である。これをもってわたしの意味するものは，一定に性質づけられた経済の仕方，すなわち，それのうちで一定の経済意志が支配し一定の技術が応用されるところの，経済生活の一定の組織である。経済体制の概念において，経済生活の歴史的に制約された特性は一つの概念的統一にまで総括されるのである。その他の国民経済学的諸概念はすべてこの上位概念または基礎概念に基づいて整理されるべきである。」[22)]

そして，そのような「経済体制」概念に対応する「経済時代」把握を組み合わせて，包括的な歴史的社会的把握をおこなうべきである，とするのである。

「実証的経験的考察方法において経済体制の概念に対応する概念は経済時代の概念である。わたしのいう経済時代の意味は，それにおいて一定の経済体制が，またより正確にいえば一定の経済体制に適応せる経済の仕方が支配的だったところの，歴史上の一期間という意味である。」[23)]

そして，『近代資本主義』第2版においては，自給自足経済時代，手工業時代と呼ばれるべき「経済時代」とそれにつづく資本主義経済体制の支配的である資本主義時代があり，それらはそれぞれの「経済体制」に対応するものとされている。

だが，これらの経済時代と経済時代とのあいだには，いくつかの経済体制の交代がしめされるところの過渡時代，いわば混合的な経済時代があることになる。これらの過渡的な混合時代にあっては，かつては支配的だった古い経済体制が次第に消滅していく一方，新たな経済体制が次第に姿を現わし

て，その支配を拡大していくことになる。かかる過渡時代は，古い経済体制からみればその末期であり，新しい経済体制からみればその初期である。

そのようなものとして，初期資本主義時代は，「資本主義」がより古い経済体制と並んで歴史上に現われており，内包的な萌芽状態から完成姿態にまで成熟し，外延的には，部門的にも地域的にも支配的となるまでに発展する時代である。初期資本主義時代の始期を決定する現実的指標は，少なくともある程度の大量現象としての資本家的企業の出現であり，そして，その初期資本主義時代の終期として高度資本主義時代の始期をしめすものは，資本主義に特有な諸相の完成的姿容の大量出現である。

全ヨーロッパについてみると，初期資本主義時代は，13 世紀中葉から 19 世紀中葉にいたるまでの時期とされている。

そのようなものとして，『近代資本主義』第 2 版の第 1 巻において「近代資本主義の歴史的基礎」として叙述される歴史的諸現象は，主として初期資本主義時代における資本主義の発展を可能ならしめた前提条件と事態をしめすものであり，そして，第 2 巻においては，「初期資本主義時代，とくに16，17，18 世紀におけるヨーロッパの経済生活」が取りあげられる。

そして，近代資本主義がその完全な理念的展開によって支配的な経済体制となりはじめた 1760 年から，老衰の徴候をしめしはじめる 1914 年までの，150 年にわたる資本主義の時代は，第 3 巻における「高度資本主義」の考察において取りあげられることになる。

そのようなものとして，『近代資本主義』第 2 版の第 1 巻と第 2 巻との構成は次のごとく構成される。

第 1 巻

序　説

第 1 部　前資本家的経済

第 1 篇 〔タイトルなし〕

第2篇　自給経済の時代
第3篇　過渡時代
第4篇　手工業経済の時代
第2部　近代資本主義の歴史的基礎
第1篇　資本主義の本質と生成
第2篇　国　　家
第3篇　技　　術
第4篇　貴金属生産
第5篇　市民的富の成立
第6篇　財貨需要の新形成
第7篇　労働力の調達
第8篇　企業家層の生成

第2巻　初期資本主義時代，とくに16，17，18世紀における
ヨーロッパの経済生活
序　　説　初期資本主義時代の概観
第1主篇　経済遂行の精神と形態
第2主篇　市　　場
第3主篇　交通制度
第4主篇　財貨の販売
第5主篇　財貨の生産
第6主篇　国民経済の総過程
結　　論　資本家的発展の抑制

このように，第2版の第1巻では，その第1部「前資本家的経済」において，「自給経済の時代」「過渡時代」「手工業経済の時代」という歴史的に変遷する「経済時代」が取り扱われたうえで，つづいて，第2部「近代資本主

義の歴史的基礎」において，初期資本主義の時代における「資本主義」の生成が取りあげられているのである。

ところで，この第2版においては，「資本主義」概念は次のようなものとされている。

「われわれは資本主義を次のごとく特徴づけられた一定の経済体制と考える。それは，秩序的に，二つの異なる人口群が，すなわち生産手段の所有者であり同時に指揮権をも有している経済主体である人たちと，無所有のたんなる労働者（経済客体としての）とが，市場によって結合されて，協働し（zusammenwirken），そして，営利原則と経済的合理主義とによって支配されているところの，一つの流通経済的組織である。」[24)]

このゾンバルトの『近代資本主義』第2版における「資本主義」概念は，先にみた『ユダヤ人と経済生活』において打ちだされた新しい「資本主義」概念と基本的に同じものである。

すでにみた『ユダヤ人と経済生活』の「資本主義」概念においても述べたように，この「資本主義」概念は『近代資本主義』初版の「資本主義」概念とはかなり大きな違いをもつものである。

その違いを要約的にしめすならば，以下のごとくである。

初版の「資本主義」概念は，次のような特徴をもっていた。

① 「手工業」との対比における《企業》形態についての概念として確定。

② 価値増殖を目的とした「資本家的企業」を基軸とした把握。

③ 営利原理にもとづく「資本家的精神」を先導的な規定因とした「資本主義」の形成。

それにたいして，第2版における「資本主義」概念の特徴は次のごとくである。

① 《企業》ではなくて《経済体制》における概念。

② 国民経済の総過程としての社会的関係における把握。

③ 基本的内容としての資本＝賃労働関係。

④ 営利主義と経済合理主義による支配。

そして，この『近代資本主義』第2版における資本主義の定義のなかでは，「資本家的企業」については言及されていない。しかし，そのあとで，定義とは別に，「資本家的経済体制の経済形態は資本家的企業である」[25]と述べ，「資本家的企業」は「資本家的経済体制の経済形態」として位置づけられているのである。

〔注〕

1) ゾンバルトの人物とその社会的活動ならびに研究については，Bernhard vom Brocke, "Sombart", *Deutsche Biographische Enzyklopädie (DBE)*, Band 9, München, 1998, S. 367–368. 戸田武雄「訳者序説」（ゾンバルト『社会政策の理想』有斐閣，1939年，所収）。岡崎次郎『ゾンバルト近代資本主義の歴史的基礎』夏目書店，1948年。木村元一『ゾンバルト近代資本主義』春秋社，1950年。小原敬士『近代資本主義の範疇――ゾンバルト「資本主義理論」――』青木書店，1948年。小笠原真『ヴェーバー/ゾンバルト/大塚久雄』昭和堂，1988年，等を参考にした。

2) Friedrich Lenger, *Werner Sombart 1863–1941 Eine Biographie*, München, 1995, S. 78–79.

3) ゾンバルトの著作については，Lenger, *Ibid.* がもっともくわしい。戸田武雄「訳者序説」（ゾンバルト『社会政策の理想』有斐閣，1939年，所収）にも，かなり詳細な「Werner Sombart 著作目録ならびに参考文献」がつけ加えられている。なお，ゾンバルトの著作のうち邦訳されているものについてはできるだけ挙げておいたが，訳書については省略したものもある。

4) 田村信一「近代資本主義の生成――ゾンバルト『近代資本主義』（初版 1902）の意義について――」（一）（二）北星学園大学経済学部『北星論集』，第33号，1996年3月，第34号，1997年3月。

5) W. Sombart, *Der moderne Kapitalismus*, 1 Aufl., 1902, Leipzig, 1 Bd., S. 76–77.

6) *Ibid.*, 1 Bd., S. 195.

7) *Ibid.*, 1 Bd., S. 206–207.

8) *Ibid.*, 1 Bd., S. 207–208.

9) *Ibid.*, 2 Bd., S. 20.

10) *Ibid.*, 2 Bd., S. 503.

11） Sombart, *Die Juden und das Wirtschaftsleben*, Leipzig, 1911. S.v. ゾンバルト『ユダヤ人と経済生活』金森誠也・安東勉訳，荒地出版社，1994 年，9 ページ。

12） Sombart, *Luxus und Kapitalismus*, München, 1913, S.v–vi. ゾンバルト『恋愛と贅沢と資本主義』金森誠也訳，論創社，2000 年，iv–v ページ

13） Sombart, *Die Juden und das Wirtschaftsleben*, S.462. 邦訳，596 ページ。

14） Sombart, *Der Bourgeoise: Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen*, München, 1913, S.476–477. ゾンバルト『ブルジョア：近代経済人の精神史』金森誠也訳，中央公論社，1990 年，482–483 ページ。

15） Sombart, “Der kapitalistische Unternehmer”, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd.29, 1909, S.693–695.

16） *Ibid.*, S.696–697.

17） *Ibid.*, S.698.

18） Sombart, *Die Juden und das Wirtschaftsleben*, S.186. 邦訳，243–244 ページ。なお，訳は必ずしも邦訳に依っていない。

19） *Ibid.*, S.186. 邦訳，243–244 ページ。

20） この『近代資本主義』第 2 版の邦訳は，岡崎次郎氏によって『近世資本主義』第 1 巻第 1 冊・第 2 冊として，生活社より 1942，1943 年に出版されているが，それは原書の第 1 巻（8 章 62 節）のうち第 6 章第 39 節までであって，第 1 巻の残りの 23 の節と第 2 巻の全部が中断されたままとなっている。

ついでながら，ゾンバルトが 1927 年に出した『近代資本主義』第 3 巻，2 冊の邦訳としては，梶山力氏によって『高度資本主義』I（有斐閣，1940 年）が出版されたが，それは全体としての 60 の節のうちの 15 節までであって，第 1 冊の残り 15 の節（16～30 節）と第 2 冊（31～60 節）の全部が残されたまま，著者死亡のため中断されたままとなっている。

その意味では，ゾンバルトの多くの著書は邦訳されているにもかかわらず，その主著たる『近代資本主義』は，初版はまったく，そして，第 2 版の第 1 巻と第 2 巻も，そしてその第 3 巻も，その大部分が邦訳されないままになっている。

だが，初版については，前掲した田村信一氏の論稿「近代資本主義論の生成――ゾンバルト『近代資本主義』（初版 1902）の意義について――」によって，そして，第 2 版については，第 1 巻の 19 節より 62 節までは岡崎次郎氏の『ゾンバルト 近世資本主義の歴史的基盤』（1948 年，夏目書店）によって，さらに，第 2 版の第 1 巻・第 2 巻と第 3 巻との全体については，木村元一氏の『ゾンバルト《近代資本主義》』（1949 年，春秋社）によって，その概要を知ることができる。

21） Sombart, *Der moderne Kapitalismus, Historisch-systematische Darstellung des gesamteuropäischen Wirtschaftslebens von seinen Auffängen bis zur Gegenwart*, Aufl. 2,

1916, Berlin, Bd. 1, S. xi–xii.『近代資本主義』邦訳，第 1 分冊，〔序〕2 ページ。

22） *Ibid.*, S. 21–22. 邦訳，26 ページ。

23） *Ibid.*, S. 22. 邦訳，27 ページ。

24） *Ibid.*, S. 319. 邦訳，第 2 分冊，466 ページ。

25） *Ibid.*, S. 321. 邦訳，468 ページ。